

# ダブルコンティンジェンシーの出口

## —相補論という方法へ—

小林 盾

### —要約—

考察は、次の順に進む。

- (1) D.C. (ダブルコンティンジェンシー) とは、社会理論を構成する上で、必ず解決が必要な問題である。
- (2) パーソンズは、価値の共有によって説明した。しかしこのパーソンズ解は、従ルールの不可能性を説明できない点で、支持できない。
- (3) 一方、後のルーマンは、不確実性の公理でもって、D.C.問題を説明する。
- (4) このルーマン解が成功しているのは、(自我の行為選択と他我の行為選択の相補性、及びこの組とルールとの相補性の) 2つの相補性を所与としているからである。
- (5) ルーマン解の成功は、D.C.解決にとって、相補論的方法が還元論より優位であることを含意する。
- (6) 以上より、社会理論にとって、相補論的方法は優位である、と結論する。

本稿は、「学説史」を伴う「方法論」である。

### —目次—

- § 1 D.C. (ダブルコンティンジェンシー) 現象とは
- § 2 D.C.問題とは
- § 3 パーソンズとルーマンの解決
- § 4 ルーマン解の意義：相補論という出口へ
- § 5 結論と課題

### —記号—

- (1) [] は小見出し。⟨ ⟩ は強調。[] は文献表示。(2) / は相補関係。→ は因果関係。(3) =def. は定義。(4) \* は注。

### —略号—

- (1) E は自我の行為選択、A は他我の行為選択、Ri はルールや価値。(2) D.C. はダブルコンティンジェンシー、S.C. はシングルコンティンジェンシー、T.C. はトリプルコンティンジェンシー。

## § 1 D.C. (ダブルコンティンジェンシー) 現象とは

本稿の対象は、ダブルコンティンジェンシー

(以下、D.C.と略称) という概念であり、現象だ\*。まず最初に § 1 で、このD.C.とは、2人の行為者の行為選択が互いに依存しあっている現象であり、相互行為での行為選択には循環性

があるという性質を持つ、この2点を示される。

### 1. 1. パーソンズ定義とD.C.現象

D.C.概念とはそもそもどのような現象なのかを、パーソンズによる定義を基に、考える。

#### 【経緯】

D.C.概念はまず、パーソンズがParsons [1951b=1960: 25]で初めて提起した。その際、[1951a]や[1951b]でパーソンズ解をも、併せて示した。これを受けて、ルーマンがLuhmann [1984=1993]で別様の解釈を与え、かつ別様の解決をも提示した。各々がどのような解決を与えたかについては、§2で述べる。

#### 【パーソンズの定義】

パーソンズは、D.C.をこう定義する。「一方、自我の要求の充足は、彼が手に入れることができる分かれ道の中から、彼が選んだものに依存している。だか、順次に、他者の反作用は、自我の選定を条件にし、これに応じた他者の相補的な選定の結果生まれるものである。」([1951b=1960: 25])

#### 【D.C.現象とは】

これを基に、D.C.現象を定義する。要するに、  
(定義) D.C.現象=def.自我の行為選択は、他我の行為選択に依存し、他我の行為選択も同様である、という現象。

#### 【例】

例えば、私(自我)と相手(他我)の二人でするジャンケンを考えよう。

(1)まず、私の手(グーかパーかチョキか)の選択について。私は、相手の手に基づいて自分の手を選択する(相手がグーならパー、チョキならグー、パーならチョキだ)。

(2)同時に、相手も、私の手に基づいて、自分の手を選択する。

この他、荒野の決闘(私が発砲するタイミン

グは、相手の発砲に依存する;同時に相手の発砲も私の発砲に依存する)とか、恋愛の始まり(相手が私を好きなら私も好きになってもいい;同時に相手も、私が好意を持っているのならその事実のおかげで私に好意を持つ)も、D.C.の顕著な例である。

#### 【D.C.は実在する】

さて、ここでいうD.C.とは、実在する。つまり、(社会とか主体とかの)実在が確認できない概念とは異なり、D.C.ははっきりと対象を明示できる現象である。

#### 【D.C.は遍在する】

もっとも、全ての相互行為には、D.C.がある。これは、行為選択をする客体・に基づいて行為選択をする行為者が二人以上いればD.C.が生じる、というパーソンズの定義から、明らか。また、実際に遍在している。

以下、この「自我の行為選択」をEgoの「E」と表記し、「他我の行為選択」をAlterの「A」と略記する。

### 1. 2. D.C.の循環性

パーソンズに基づくD.C.現象定義は、一見凡庸である。が、ここから《行為選択は循環する》という重大な帰結が生じる。それを重視したのが、ルーマンだった。

#### 【行為選択は循環する】

パーソンズも気づいていた通り、上の定義から、次の循環が生じる。

(1)EがAに依存し、かつそのAがEに依存する。

(2)よって、EはAを介して、自分の行為選択Eに依存する。

(3)つまり、EはE自身に基づいた行為選択であるはずである。

(4)同じことは、Aについても言える。

(5)だが、(3)は背理である。よって、相互行為は不可能なはずである。

【循環の記号化】

これを記号化すると、次となる。ここで、Eは自我の行為選択を、Aは他我の行為選択を、関数fは「自我がAに依存してEへと変換する関数」を、関数gは「他我がEに依存してAへと変換する関数」を、各々表す。

$$E=f(A) \quad \dots \textcircled{1}$$

$$A=g(E) \quad \dots \textcircled{2}$$

一見して明らかのように、②を①に代入して、

$$E=f(g(E)) \quad \dots \textcircled{3}$$

が得られるし、同様に①を②に代入して、

$$A=g(f(A)) \quad \dots \textcircled{4}$$

も得られる。さらにこの操作を繰り返すと、次の連立方程式を得る。

$$E=f(A)=f(g(E))=f(g(f(g(\dots(E)\dots))))$$

$$A=g(E)=g(f(A))=g(f(g(f(\dots(A)\dots)))) \quad \dots \textcircled{5}$$

【循環性に着目】

以下で着目するのは、③と④式の循環性である。⑤の無限性は、重視しない（理由は、2.2.の【①】【②】で述べる。これは、知識のD.C.,あるいはコンティンジェンシー概念固有のものだから）。

なお、この循環から帰結する行為の不可能性を、相互行為の《理念的不可能性》と呼ぼう。

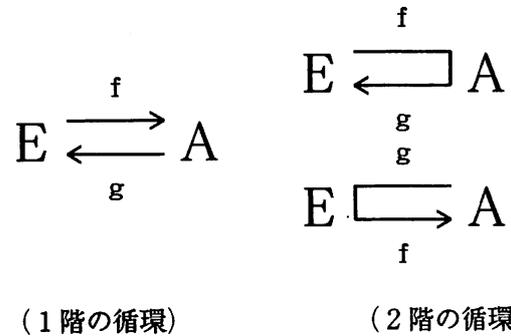
【1階と2階の循環】

また、①②と③④を分けよう。①と②の組では、互いに依存しあっているに過ぎず、循環は潜在的だ。これを《1階の循環》と呼ぶ。一方、③と④の組だと、循環は顕在的だ。これを《2階の循環》と呼ぶ。

勿論、外延的には1階の循環も2階の循環も同じだ。どちらがより良く循環を表現しているのか、の差に過ぎない。

【循環の図示】

この2つの循環を図示すると、以下。矢印は「依存」を表す。



【循環の例】

例えば、ジャンケンで私がどの手をだすかは、私の出す手自身による。私がグーを出すとしたら相手はパーを出す、よって私はチョキという行為選択をする。この時、チョキはグーでなくてはならない（これは矛盾だ）。Eが基づくのはE自身のはずだから\*。

1. 3. ルーマンによるD.C.の定義

こうした循環に特別敏感なのが、ルーマンのD.C.定義である。

【ルーマンの定義】

同じ現象を、(パーソンズの定式化として紹介しながらパーソンズとは異なる解釈で)こう定義する\*。「どのように自分自身が行為するか、及びどのように自分自身がその行為を相手の人に接続しようとしているのかに、相手の人がその行為を依存させており、その立場を変えて相手からみても同様であるのなら、相手の人の行為も自分自身の行為も起こりえない」([1974=1993:158])。

【定式化】

要言すると、D.C.(ルーマン版)=def.自我の選択は他我選択に依存し、他我也同様であるため、両行為者間で選択循環が起こって、両者共初期行為を決定できない現象\*\*。

## § 2 D.C.問題とは

前節 § 1 では、パーソンズとルーマンのD.C.定義を通して、D.C.の特徴を循環性として捉えた。

本節 § 2 ではそこから、D.C.問題（つまりD.C.の問題性）をある落差として捉え、かつD.C.解決の意義を、考える。その際、S.C.（シングルコンティンジェンシー）とT.C.（トリプルコンティンジェンシー）の新概念を導入する。

### 2. 1. D.C.の問題性

ルーマンの定義から、ここでD.C.の問題性を抽出する。それは、《理念的不可能性》と《現実的可能性》の落差である。

【本質規定ではない】

ところで、D.C.の問題性は、1. 2. で見たような「相互行為は循環性故に不可能である」といった本質規定にあるのではない。むしろ、このように論理的・理念的には不可能なはずの相互行為が、現実には生じていること、このギャップこそが、解かれるべき問題なのである。

【D.C.の問題性】

殊更にパラドクシカルな本質を暴きたてるのが本稿の目的ではない。相互行為が論理的・理念的には不可能である（あるいは不確定・未規定・不安定である）ことと、にも拘わらず現実的・日常的には可能である（あるいは確定的・規定的・安定的である）こと。この落差を説明することが、目的である。定義すれば、

（定義）D.C.問題＝def.相互行為には、《理念的不可能性》と《現実的可能性》の落差があること。

【例】

落差の例。ジャンケンでは必勝の手が決まらなくても（理念的不可能性）、現実には何かの手を出してしまう（現実的可能性）だろう。

【D.C.解決とは】

D.C.問題の落差を説明することを、以下では《D.C.解決》と呼ぶ。§ 3では、D.C.におけるこの《理念的不可能性と現実的可能性の落差》を、パーソンズとルーマンがどう埋める・説明するのか、を吟味する。

ところで、こうした観察者視点に立った理論的なD.C.解決（落差の説明）のみを、以下では《D.C.解決》と呼ぶ。当事者がどうD.C.の困難を乗り切っているか、は別稿に譲る（理由は、次項2. 2. の【⑥】を参照）。

### 2. 2. D.C.概念の限定

前項2. 1. で、D.C.問題を定式化した。その考察を効果的に行うために、ここでは、本稿で扱うD.C.概念が《何ではないか》を7項目で明示化して、限定する。

【①コンティンジェンシーよりダブルを重視】

限定の第一に、D.C.の構成要素の内、単に《コンティンジェント》であることよりもそれが《ダブル》であることに着目する。

なぜなら、単なるコンティンジェンシー現象（2. 3. で後述するシングルコンティンジェンシー）は、《フレーム問題》という哲学の問題である。「無限の事態に有限のルールでどう対処するのか」というフレーム問題は、現象説明を第一義とするなら、冗長だ。むしろ相互的に（ダブルに）コンティンジェントな相互作用・の考察の方が、より社会学にとっては生産的であろう。

【②知識のD.C.ではなく、行為のD.C.である】

限定の第二点目は、共有知識を巡る《知識の

D.C.》ではなく、行為の初期決定を巡る《行為のD.C.》にのみ、着目すること。知識のD.C.では、時間的な遅延が伴うが、本稿では純粋に論理的な循環のみを扱いたい。

なお、知識のD.C.とは、通常《共有知のパラドクス》と呼ばれるものである（Grice[1989]と大澤[1989]参照のこと）。

### 【③他我の妥当性は問わない】

三点目は、哲学的な他我論は問わない、ことだ。根拠を求める哲学では、D.C.の問題に入る前に、《他我の妥当性》や《行為における自由の可能性》や《他者の行為の理解可能性》を問う（例えば、Davidson[1980=1990]）。が、これも根拠より説明を重視するはずの社会学には冗長だ。E（自我の行為選択）・A（他我の行為選択）・f（自我の行為関数）・g（他我の行為関数）、の存在は、所与としたい。

### 【④本質規定ではなく、落差に着目】

限定の四点目は、先に2. 1. で挙げた、パラドクスの本質を提示することではない点。そうではなく、そうしたパラドクスの本質と非パラドクスの現実の、ギャップを埋めることこそが、D.C.の問題なのであった。

### 【⑤学説史かつ方法論である】

5つ目に、本稿の目的は、学説整理であると共に、新たな方法論の抽出にある。論点を先取りすれば、《相補論》という方法概念を、D.C.の吟味を通して、整備したい。故に、学説の参照は最小限に止め、むしろ論旨をクリアーにすることを優先させる。

### 【⑥独自の解決は提示しない】

また、本稿は学説整理とそこからの方法抽出が目的であるから、あくまで既存理論の整理と抽象に考察を絞る。よって、積極的に自分でD.C.解決を与えることは禁欲する。同様の理由から、当事者視点でのD.C.解決にも言

及しない。

### 【⑦D.C.概念の整理】

最後に、D.C.概念に纏わる術語を、整理する。《D.C.現象》とは、D.C.問題を潜在的に孕んでいる、全ての相互行為（単にD.C.と表記する時は、この意味）。《D.C.問題》とは、相互行為の理念的不可能性と現実的可能性・の落差。《D.C.解決》とは、この落差を説明すること。この3つの意味を総括するのが、《D.C.概念》である。

## 2. 3. 社会学におけるD.C.解決の意義

D.C.問題を解決することは、どのような意義を社会学の中で持っているのか。以下、2点挙げる。

### 【①：諸アポリアの典型である】

その意義の一つ目は、D.C.問題が《社会と個人の接点たる「相互行為」上の、アポリアである》ことだ。ということは、社会学における諸アポリア（例：個人と社会の還元可能性・他者の妥当性・共同主観性の妥当性）の、典型でもある。逆に言えば、D.C.の考察抜きに、相互行為ひいては社会理論を語ることは、できないはずである。

この意味から、D.C.の解決は、社会理論にとって、必須である。

### 【②：S.C.からT.C.への媒介となる】

意義の二つ目は、《D.C.によって、S.C.\*（シングル・コンティンジェンシー）からT.C.\*\*（トリプル・コンティンジェンシー）を媒介する》点である。

### 【D.C.の意義】

この2つの意義から、D.C.の解決は結局、社会理論にとって次の意義を持つ。

（D.C.解決の意義）D.C.解決とは、社会理論にとって、解決が必須である。

### § 3 パーソンズとルーマンの解決

前節でD.C.の問題性と意義を指摘した。問題性とは、理念的不可能性と現実的可能性の落差であり、意義とは、社会理論にとって解決が必須であること、であった。

本節では、このD.C.解決を巡る2人の社会学者の主張及び解決を、概観し吟味する。《従ルールの不可能性》が試金石となる。結果、パーソンズの解決は退けられ、ルーマン解のみが妥当と結論される。

#### 3. 1. パーソンズ解

パーソンズの解決を見る。これは、《従ルールの不可能性》を説明出来ない点で、支持できない。

##### 【D.C.のパーソンズ解】

さて、パーソンズは、次の手順で解決を与えた\*。

- (1)D.C.とは、自我の期待を他我は期待するし、その期待を自我は期待する、という「期待の相補性」[1951b=1960:24]である。
- (2)すると、互いに相手の期待を期待しあうので、「適切に反作用する」[1951b=1960:168]。
- (3)その結果、「記号の共有体系」を「獲得」する[1951b=1960:25]。換言すれば、「価値を事実上分有する」[1951b=1960:18]ことになる。
- (4)こうして、相互行為が可能となる。

要するに、価値や規範やコードの共有によって、D.C.の落差が説明されるのだ。

##### 【パーソンズ解の不十分点】

しかし、このパーソンズ解には、致命的な欠点がある。共有価値を事前に設定すると、そのルールが途中で変更する（むしろしてしまう）・という（ありふれた）現象を、説明でき

なくなるのだ。これは、クリプキが指摘した《従ルールの不可能性》(Kripke[1982=1983]及び小林[1992])問題である。D.C.解決は、この従ルールの解決（すなわち説明）をも、求められるはずである\*\*。

##### 【従ルールの不可能性とは】

ここで、《従ルールの不可能性》とは何か、を略説する。クリプキは、ヴィトゲンシュタインの懐疑を受けて、次の結論を得た。

- (1)ルールは、常に変わりうる。
- (2)例えば、「68+57」という演算は、125と答える「プラス」ではなく5と答える「クワス」でも（常に）ありえる。
- (3)このように、ルールを所与として、そのルールに従うことは、原理的に不可能なのである。

この《従ルールの不可能性》現象は、パーソンズ解の反証となる。よって、

（パーソンズ解の欠点）従ルールの不可能性への配慮・が欠如していること。

##### 【パーソンズ解の記号化】

以上のことを、記号化する。R1は価値やルールを、→は因果関係を、/は相即・相補的關係を、表す。

- (1)まず、E/A（自我と他我は、同格で相即的だから）。
- (2)よって、パーソンズ解とは、R1→E/A。
- (3)しかし、これでは、E/A→R1という現象を説明できない。

#### 3. 2. ルーマン解

パーソンズ解の欠点を、ルーマンは、未規定故に規定的という《不確実性の公理》を導入することで、解消する。本稿では、従ルールの不可能性を説明し得る点で、このルーマン解を一応支持する。

##### 【2つの解答】

ルーマンには、前期と後期で異なった解答がある。より重要なのは、後期である。前期の解決は、理論構成上はパーソンズと同じだから。パーソンズの《価値》を《意味》に変えただけである\*。

#### 【後期の解決：不確実性の公理】

が、ルーマンは後に、別様の解を与える。その前提となるのが、「未規定性とは偶有性であるから、却って行為を可能にする」と見做すような《不確実性Unwahrscheinlichkeitの公理》である。この思考の転換の基礎には、「行為選択が可能となるのは、一定の自由度（つまり偶有性）がある時のみである」というルーマン一流の命題がある。

この不確実性の公理を基にしたD.C.の解決（つまり落差の穴埋め）は、次の順でなされる。

- (1)D.C.状況で初めて、EにとってAは「規定不可能になる」([1984=1993:187])。
- (2)不確実性の公理より、この未規定性が「確実さをもたらす」、つまり行為を可能にする([1984=1993:180])。
- (3)こうして、D.C.とともに社会システムが創発する。なぜなら、D.C.によって初めて、社会システムに必要な・行為の偶有性・が確保されるから([1984=1993:180])。

### 3. 3. ルーマン解は成功

#### 【ルーマン解は成功している】

ルーマン解とは、換言すると、こうだ。

- (1)D.C.現象の《理念的不可能性》を通して、初めて行為の偶有性が生じて、
- (2)その結果、(EとAという)行為選択の自由度が確保されて、初めて《現実的な可能性》を行為が得る。

このルーマン解は、ひとまず妥当なものとし

て、論を進める。以下の考察でルーマンを取り上げる際には、専らこの《未規定故に、偶有性が確保されて、行為が可能となる》という後期の解を念頭に置くことにする。

#### 【成功の秘訣】

なぜ、妥当なのか。ここで、《社会システムの成立》と《行為の成立》を、同時と見ている([1984=1993:203])点に、注目したい。この相補論的立場\*によって、パーソンズ解の困難（つまり従ルールの不可能性を説明できないこと）を、克服するのだ。

#### 【パーソンズ解の超克】

パーソンズはD.C.の解決を、RI（ルールあるいは価値・規範・コード）からE/A（当該の2つの行為選択）を因果的に説明した。これでは、従ルートを説明できないのだった。

この失敗を踏まえ、ルーマンは、（社会システムを広くRIと考えると）因果的説明を放棄する。RIとE/Aを同時成立な相補的關係とするのだ。結果、E/AからRIへの因果関係も、相補的である、として説明できることになる\*\*。なぜなら、XとYの相補性をみとめるなら(X/Y)、XからYへの因果性(X→Y)もその逆(Y→X)も相補性は含む、と言えるから(4. 1. の【相補性の条件】参照)。

#### 【ルーマン解の記号化】

記号化して表現すると、ルーマンは、

- (1)RI→E/A、というパーソンズ解に対して、
- (2)RI/(E/A)、としてD.C.を捉えることで、
- (3)E/A→RIをも、説明する。

つまり、ルーマン解の成功の秘訣とは、E/AとRI/(E/A)という2つの相補性を導入した点にある。

以上で、学説の整理を終わる。§4では、これを踏まえて、D.C.の解決が持つ《方法的含意》を探る。それは、《相補論》である。

#### § 4 ルーマン解の意義：相補論という出口へ

ここまでで、パーソンズからD.C.現象の定義 (§ 1) を、ルーマンからD.C.問題の定義 (§ 2) を行い、更にパーソンズ解とルーマン解を吟味 (§ 3) した。この§ 4では、以上の学説整理を踏まえて、唯一妥当としたルーマン解の方法的含意を、《相補性》として新たに抽出する。立場としては、その認識利得の大きさから、相補論を擁護したい。

ただし以下の相補性定義は、必ずしも十分ではない。一つの試論として受け取ってほしい。

##### 4. 1. 相補論と還元論の定義

ルーマン解の旨みは、2つの相補性の導入にある、と結論した。ここで、その相補性概念を、厳密に定義する。

###### 【対立概念】

《相補論》とは、諸変数・諸事項の相即・対称的な関係のみに着目する説明方法である。対立概念の《還元論》は、優越要因を立てて、非対称的な因果説明をする。

###### 【相補論の定義】

先ず、相補論概念を定義する。

(定義) 相補論=def.説明対象の同時発生性・相即性・対称性を所与として、そうした諸関係のみでもって説明する方法。

この時、優越要因による因果性は、持ち込まない。

###### 【相補性の定義】

次に《相補性》を定義する。

(定義) 相補性=def.当該の諸変数・諸事項が、同時発生的・相即的・対称的であるような、関係。

###### 【還元論の定義】

相補論と対をなす概念は、《還元論》である。

(定義) 還元論=def.説明対象の還元性を所与として、優越要因による因果関係でもって説明する方法。

###### 【相補性の条件】

このままでは、相補性概念が余りに漠然としている。そこで、次のように限定する。

(相補性の条件) XとYが相補的である

(つまりX/Y) ためには、

(1) XとYが同時発生する論理的関連性があること (同時発生性) と、  
(2) 互いに必要十分条件であること (相即性) と、

(3) 一方的な (つまり非循環的な) 因果性が存在しないこと (対称性)、

のいずれか、あるいは複数を満たすことが、条件である。

ただし、この命題は、更なる吟味が必要だが。

###### 【例】

①相補的説明の例：ある《現象》は必ず《機能》を持つ、といういわば機能実在論の説明。この時、現象によって機能は生じているが、同時に機能 (正確には機能要件) によって現象も生じる。

②相補的現象の例：人体にとって、《神経系》と《循環系》は、相補的である。

③還元的説明の例：ある《機能》は、《現象》に観察者が読み込んだものに過ぎない、とするいわば機能唯名論の説明。

###### 【仮定】

さしあたり、社会科学の方法にはこの2つしかない、かつ両者は直和分割である、と仮定して議論を進める。以下では、還元論が不可能であることが示され、結果、相補論のみが方法的に妥当であることが、結論される。

#### 4. 2. 相補論は有望である

社会理論にとって、相補論が還元論よりも優位であることを、示す。

##### 【方針】

D.C.解決は、社会理論にとって必須であった(2. 3. より)。以下の3つの還元論ではD.C.解決が原理的に困難なことから、社会理論にとって還元論が困難であることを、示唆する。この分類は網羅的ではないが、ほぼ全域的であろう。

##### 【①独我論】

独我論では、自我のみが存在し、AやRIはEから説明される。自我還元論と言えよう。この時、そもそもS.C.しか存在せず、D.C.が問題化しない。

##### 【②主体還元論】

次に、主体還元論を考える。主体還元論とは、自我あるいは他我の存在を所与とするが、超越的なルール(や社会)を自我あるいは他我から説明する立場。

この時、EとAは相補的。D.C.解決には、RIをEやAから因果的に説明する必要がある。が、それは原理的に困難である(Alexander[1988]参照)。

##### 【③集合性還元論】

集合性還元論とは、RIを所与として、EやAを説明する立場。このRIは、「物としての社会」(Durkheim[1895=1978])が典型。

この時、 $E/A$ 、かつ $RI \rightarrow E/A$ 、である。すると、 $\langle E/A \rightarrow RI \rangle$ の因果説明が、困難(つまり、従ルールの不可能性)。パーソンズ解と同じ難点を孕んでいるのだ。

##### 【還元論は困難である】

以上より、主要な還元論はD.C.解決に関して困難であることが、示された。もし、相補論が

可能であることが示せれば、〈相補論は社会理論の方法として有望である〉ことを示せる。なぜなら、還元論と相補論は、方法として網羅的かつ直和分割的だから。

##### 【相補論は可能である】

さて、ルーマン解を範とする相補論的D.C.解決は、次の構成をとった。

(1)前提： $E/A$ は相補、かつ $RI/(E/A)$ も相補的である。

(2)解決：これと、不確実性公理の助けもあって、D.C.問題の落差を穴埋めする。

こうして、相補論的なD.C.の解決は、可能であることを示せる。

##### 【相補論は、D.C.解決に優位である】

以上の議論を踏まえて、〈相補論は、D.C.解決に、優位である〉と結論したい。

まず、十分条件であることは、ルーマン解より明らか。また、還元論では困難なことから、必要条件である、とも言えそうである。

##### 【相補論は、社会理論でも優位である】

さて、D.C.の解決とは、社会理論にとって必須であった。とすると、D.C.解決に相補論が優位ならば、当然、社会理論にとっても、相補論が方法として優位となる。

(結論) 相補論は、社会理論にとって、優位である。

#### 4. 3. 相補論の認識利得

このように相補論擁護にこだわるのは、以下の認識利得があり得るからである。簡単に素描する。

##### 【諸理論的方法的背景となる】

まず、理論の新たな方法的背景として、意味を持つ。例えば、

(1)現象と機能の相補性、

(2)機能と構造の相補性、

(3)問いと答えの相補性、  
などを吟味あるいは正当化できそうだ。

#### 【諸現象を説明できる】

また、いくつかの社会現象を説明したり、それらを用いて他の現象を説明するのに便利そうである。例えば、

- (1)行為とルールとの相補性、
- (2)自我と他我の相補性、
- (3)言説と現象の相補性、  
などが、想定できる。

## § 5 結論と課題

以上で、考察を終わる。ここでは、ここまでの考察を、結論として総括する。併せて、今後の課題も、列挙する。

### 5. 1. 結論

本稿で考察したことは、以下の通りである。

- (1)本稿の目的は、相互行為に付随するD.C.概念を整理し、かつ方法的含意を明示すること (§ 1)。
- (2)パーソンズを基に、まずD.C.現象を「行為選択の依存が2重である」と定義した (§ 1)。
- (3)続いて、ルーマンを基に、D.C.問題を「理念的不可能性と現実的可能性の落差」と定義した (§ 2)。
- (4)また、D.C.解決とは、この落差を埋めることである (§ 2)。
- (5)パーソンズ解とは、 $RI \rightarrow E/A$ とするもの。これは逆の因果関係を説明できないので、支持できない (§ 3)。
- (6)ルーマン解は、 $E/A$ を相補的とした上で、 $RI/(E/A)$ をも相補的として、妥当なD.C.解決となった。つまり、パーソンズ解は不十分な相補論だったのだ (§ 4)。

(7)結局、ルーマン解の意義は、相補論という方法的出口の・社会科学における優位性を、含意する点にある (§ 4)。

(8)さて、本稿のオリジナリティは、D.C.概念の整理 (D.C.現象とD.C.問題とD.C.解決の区別)、相補論概念の抽出、にあるといえよう。

### 5. 2. 課題

続いて、本稿でやり残したこと、及び吟味が足りなかったと思える点を、列挙する。

- (1)D.C.問題への、独自の解決を提示する。その際、S.C.とD.C.の関連、及びT.C.とD.C.の関連も、考察する。
- (2)相補論概念を、彫琢する。例えば、相補論とは、現象なのか、説明なのか。また、還元論では本当に不可能か。また還元論と相補論は、本当に直和分割か。
- (3)精神医学における・D.C.の理念的不可能性の発現を、実証例として、探す。

#### —注—

##### \* § 1 【D.C.を取り上げる理由】

ところで、なぜこのD.C.を本稿の研究対象とするのか。次の2つの理由による。

- (1)D.C.は、相互行為に必ず随伴する現象である。しかし、その割りには学説整理及び概念整理が、不十分であった。
- (2)また、D.C.解決の持つ方法的含意が、見落とされてきたので、新たに〈相補論〉として提示したい。

##### \* 1. 2. 【時間的な遅延はない】

ここで予め注意を喚起したい。ここに時間的な遅延はない、ことを。なぜなら、D.C.とは時間の中で行われるイメージ交換ではなく、無時間的な論理的な操作なのだから。

##### \* 1. 3. 【概念の変化】

パーソンズのD.C.とルーマンのD.C.がどう異なるか、2点で補足する。

(1)「コンティンジェンシー」概念を、パーソンズは「依存」contingent on[1951a: 11=1974: 16]と捉える。対してルーマンは、「偶有」Kontingenz[1884=1993: 163]と捉える。偶有とは、様相論理学で必然の対となる概念。要するに、〈Aはグーでもありうるし、グー以外（パーやチョコキ）でもありうる〉という、別様の可能性があること。

(2)パーソンズは、せいぜい相互行為を不安定にするもの、とD.C.を考えていた。が、ルーマンは、行為を未規定にする、とより深刻に考える。

こうした概念の違いは、そもそも「問い」や「関心」が違う・とも言える。が、同じ「現象」に着目している点で、なお同じ概念である・と考える。

#### \* 2. 3. 【S.C.とは】

S.C.とは、S.C.=def.自我の行為Eは、客体に依存するが、その客体は少なくとも自我には依存していない、現象。外延は、非社会的行為やフレーム問題である。

さて、D.C.は、S.C.より2倍より多く有意に複雑である。非社会的行為は、D.C.のような循環を持たない。

#### \*\* 2. 3. 【T.C.とは】

T.C.とは、T.C.=def. 3人の行為者が、各々、他の行為者の行為に、行為選択を依存している現象。3人の社会的行為や社会的関係である。

その時、D.C.は、T.C.の、基礎である。D.C.が3つ結合したものがT.C.だから（3人いれば3組のD.C.がある）。恐らく、T.C.はD.C.の3倍より多く複雑であろう。ただし、T.C.とD.C.の違いに関しては、別稿に譲りたい（ジンメル([1908=1972])の考察も参照）。

#### \* 3. 1. 【機能としてのD.C.解決】

ただしここで、ある独特の注意を要する。というのは、パーソンズの理論体系にとって、実はD.C.

とは〈解決されるべき問題〉なのではない。そうではなく、価値指向や文化システムや規範の〈機能〉として（事後的に）抽出されたものなのだ。

つまり、〈価値の機能は何か?〉という問いに対して、〈D.C.の克服〉を導出したのだ。決して、D.C.という問題が先にあって、後に理論上の要請から価値が導出されたのではない。因みに、機能概念とは、事象間の相関概念だから、逆もいえる。つまり、〈D.C.の機能は何か?〉という問いに対して、〈価値創出への圧力となること〉と捉えることもできる。

また、ルーマンにとっても、D.C.は機能へと転換されている。つまり、〈D.C.の機能は何か〉に対して、〈偶有性の確保〉として捉えているのだ。

#### \*\* 3. 1. 【なぜ従ルールの説明が必要か】

無論、〈D.C.問題〉と〈従ルール問題〉は、独立である。この2つの結合は、恣意的だ。が、一般に、ある理論の精度を上げるには、より広範囲の本質的な〈問題〉に対応することが求められる。また、ある理論分野には固有の〈本質的〉問題がある（例えば、物理学における光や、数学における自然数の位置づけ）。ここでは、行為（あるいは相互行為）を考察するに当たって、このD.C.問題と従ルール問題の2つの問題解決が必須である・と考えている。

#### \* 3. 2. 【前期の解決：意味への参照】

前期のD.C.解決は、次の手順で説明される。

- (1)自我と他我が「共に期待して」、
- (2)「予期の予期」が形成され、
- (3)その結果、意味が「期待の総合」を行う。  
[1971=1984: 65-68]より。

#### \* 3. 3. 【相補性とは】

なお、〈相補性〉については、次節§4で詳説する。差し当たりは、〈複数の現象が、同時成立的・対称的・相即的であること〉とする。

**\*\* 3. 3. 【3つの工夫】**

ここで、理想的不可能性／現実的可能性の落差説明・というD.C.解決をするに当たり、パーソンズとルーマンが行った工夫を、3点確認しておく。

- ①：アポリアを機能へ。両者の共通性の第一点目は、〈D.C.の存在〉と〈社会の存在〉を因果的には問わない、ということだ。そうではなく、D.C.と社会の〈相補的關係〉を理論前提として、社会にとって、D.C.はどのような〈機能〉を持つかへと、問いを転換している。この限りでは、パーソンズは相補論の先駆けといえる。ただし、R1とE/Aの相補性までに配慮がなかった点で、不十分な相補論であった。
- ②：行為の可能性を社会の可能性へ。加えて、D.C.の〈現実的可能性〉の面を拡大して〈社会の存立可能性〉に転換した。こうして、D.C.の機能を問えることになった。

③：相互未規定を相互規定へ。〈未規定〉な関係を〈相互規定的〉な関係へと、転換した。これはルーマン解にのみ該当することだが。

**\* 4. 1. 【相補性の概念系譜】**

ここでいう相補性は、量子力学でいう〈相補性〉から発想を得ているとはいえ、概念上は別物である。もし量子力学における含意をそのまま社会学に適用するとしたら、〈個人の位置と、個人間の関係を、同時に捉えることは不可能である〉こと、あるいは〈観察者視点からの社会現象と当事者視点からのものでは原理的に異なる〉こと、とでもなろうか。

\* 謝辞。論文制作にあたり、日本社会学会における馬場靖雄氏、言語研究会における浅野智彦氏、社会科学者のための古典研究会における桜井芳生氏、橋本努氏、からのコメントを、参考にしました。ここに謝意を表します。

——文献リスト——

- Alexander, Jeffrey C. *Action and Its Environment : Toward a new Synthesis*, Columbia University Press.
- Davidson, Donald. 1980, *Essays on Actions and Events*=1990, 服部裕幸・柴田正良訳, 『行為と出来事』, 勁草書房。
- Durkheim, Émile. 1895, *Les Règles de la Méthode Sociologique*=1978, 宮島喬訳, 『社会学的方法の規準』(岩波文庫), 岩波書店。
- Grice, H. P. 1989, *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.
- Habermas, Jürgen. & Luhmann, Niklas. 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*=1984, 山口節雄他訳, 『ハーバースルーマン論争：批判理論と社会システム理論(上)』, 木鐸社。
- 小林盾, 1992, 「様相・行為・ルール：様相概念による, 行為とルールの回帰性の位置づけ」, 『ソシオロギス』No.16, ソシオロギス編集委員会。
- Kripke, Saul.A. 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language : An Elementary Exposition*=1983, 黒崎宏訳, 『ウィトゲンシュタインのパラドクス』, 産業図書。
- Luhmann, Niklas. 1984, *Soziale Systeme*=1993, 佐藤勉監訳, 『社会システム理論(上)』, 恒星社厚生閣。
- 大澤真幸, 1989, 「コミュニケーション」, 『哲学』vol3-1(No.6), 哲学書房。
- Parsons, Talcott. 1951a, *The Social System*=1974, 佐藤勉訳, 『社会体系論』(現代社会学体系14), 青木書店。
- & Shils, E.A. 1951b, *Toward a General Theory of Action*=1960, 永井道雄他訳, 『行為の総合理論をめざして』,

日本評論新社。

Simmel, Georg. 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*=1972, 堀喜望・居安正訳。  
『集団の社会学』, ミネルヴァ書房。

(こばやし じゅん)

## NHKブックス 時代の半歩先を読む

# 現象学入門

竹田青嗣

現象学は難しいという誤解をとり除き、「世界の意味」を問うフッサールの考え方の芯を平明な言葉で説く。デカルト以来の哲学・現代思想が見えてくる。  
定価860円

# 未婚化の社会学

大橋照枝

高学歴化と就業率の上昇は、女性に経済的自立をもたらし、結婚よりもシングルライフを謳歌させる傾向が進んでいる。この社会現象から新しい結婚観に迫る。  
定価830円

# 現代日本人の

# 意識構造

〔第3版〕

NHK世論  
調査部編

5年ごと、5千人の面接による最新の調査・分析を加え、日本人の15年間の軌跡をデータに凝縮。いま日本人が何を考えているのかこの一冊で全てが分かる。  
定価800円

# 外国人労働者

# と日本

梶田孝道

外国人労働者が日本社会に根をおろし、異質な文化が深くまじりあうと社会はいかに変質するか。中・長期的な目線でとらえた外国人労働者問題の構造。  
定価890円

〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1  
☎03-3780-3339

**(NHK出版)**

\*送料は冊数にかかわらず1回240円です。  
\*定価は税込みです。